

(19)日本国特許庁 (J P)

(12) 公開特許公報 (A)

(11)特許出願公開番号

特開平9-48444

(43)公開日 平成9年(1997)2月18日

(51)Int.Cl.⁹

識別記号

庁内整理番号

F I

技術表示箇所

B 6 5 D 39/10

B 6 5 D 39/10

審査請求 未請求 請求項の数 6 O L (全 6 頁)

(21)出願番号 特願平7-203650

(22)出願日 平成7年(1995)8月9日

(71)出願人 390003148

中国パール販売株式会社

東京都千代田区神田練堀町73番地

(72)発明者 三宅 輝義

東京都千代田区神田練堀町73番地 中国パール販売株式会社内

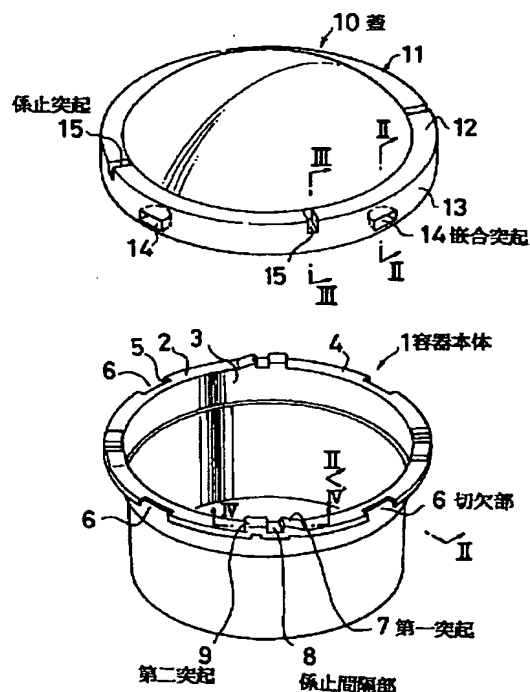
(74)代理人 弁理士 竹内 三郎 (外1名)

(54)【発明の名称】 蓋嵌合容器

(57)【要約】

【課題】 圧空真空成形等による蓋嵌合容器であって、蓋の閉止が容易かつ確実にでき、開蓋時に反動を与えず円滑に開蓋することができるようにした。

【解決手段】 上周縁部を折曲状の上縁部2とし、この外側部に蓋の嵌合突起14を嵌入可能な切欠部6を形成し、円周方向に適宜ずれた位置の鏝面3から上方に第一突起7及び第二突起9を、蓋の嵌合突起の巾以上の係止間隔を置いて連設してなる合成樹脂製容器本体1に対し、下周縁部を被嵌形の下縁部11とし、この外側端部から内方に切欠部6に嵌入可能な嵌合突起14を形成し、水平状面12の嵌合突起14から円周方向の第一突起7よりは近い位置において、下方に係止突起15に係止間隔部8に係合可能なように形成してなる蓋10を被嵌させ、蓋を回転させた時に嵌合突起14が第一突起7を乗り越えて係止間隔部8に係止するようにした。



【特許請求の範囲】

【請求項1】 合成樹脂製容器本体の上周縁部を折曲状の上縁部とし、この上縁部の外側部に蓋の嵌合突起を嵌入可能な切欠部を1又は2以上形成し、この切欠部から円周方向に適宜ずれた位置の上縁部位置に、係合案内としての第一突起及びストッパーとしての第二突起を、蓋の嵌合突起の巾乃至巾以上の係止間隔を置いて連設した構成を有してなる容器本体と、合成樹脂製蓋の下周縁部を容器本体の上縁部に被嵌する下縁部とし、この下縁部の外側端部から内方に上記切欠部に嵌入可能な嵌合突起を1又は定間隔で2以上形成し、被嵌した蓋を回転させた時に嵌合突起が上記係止間隙部に係止可能に形成した構成を有してなる蓋とからなる蓋嵌合容器。

【請求項2】 容器本体の第一突起及び第二突起を上縁部の上面部から下方に突設し、被嵌した蓋を回転させて嵌合突起の上部と第一突起の下部とが当接した時に蓋部分乃至容器本体部分が加圧によって若干変形可能なように形成してなる構成を有する請求項1に記載の蓋嵌合容器。

【請求項3】 容器本体の第一突起及び第二突起を上縁部の内側部から外方に突設し、被嵌した蓋を回転させて嵌合突起の先端部と第一突起の先端部とが当接した時に蓋部分乃至容器本体部分が加圧によって若干変形可能なように形成してなる構成を有する請求項1に記載の蓋嵌合容器。

【請求項4】 合成樹脂製容器本体の上周縁部を折曲状の上縁部とし、この上縁部の外側部に蓋の嵌合突起を嵌入可能な切欠部を1又は2以上形成し、この切欠部から円周方向に適宜ずれた位置の上縁部位置に、係合案内としての第一突起及びストッパーとしての第二突起を、蓋の係止突起の巾乃至巾以上の係止間隔を置いて連設した構成を有してなる容器本体と、合成樹脂製蓋の下周縁部を容器本体の上縁部に被嵌する下縁部とし、この下縁部の外側端部から内方に上記切欠部に嵌入可能な嵌合突起を1又は定間隔で2以上形成し、かつ上記嵌合突起から円周方向にずれ、容器本体の第一突起と対応する位置から第二突起とは逆方向にずれた位置の周縁部に係止突起を形成し、被嵌した蓋を回転させた時に係止突起が上記係止間隙部に係止可能に形成した構成を有してなる蓋とからなる蓋嵌合容器。

【請求項5】 容器本体の第一突起及び第二突起を上縁部から上方に突設し、蓋の係止突起を周縁部から下方に突設し、被嵌した蓋を回転させて係止突起の下部と第一突起の上部とが当接した時に蓋部分乃至容器本体部分が加圧によって若干変形可能なように形成してなる構成を有する請求項4に記載の蓋嵌合容器。

【請求項6】 容器本体の第一突起及び第二突起を上縁部の内側に突設し、蓋の係止突起を下縁部の内側から下方に突設し、被嵌した蓋を回転させて係止突起の先端部

と第一突起の先端部とが当接した時に蓋部分乃至容器本体部分が加圧によって若干変形可能なように形成してなる構成を有する請求項4に記載の蓋嵌合容器。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】本発明は、合成樹脂製の蓋嵌合容器、特に圧空真空成形等のサーモフォーミング成形に好適な蓋嵌合容器に関する。

【0002】

【従来の技術】従来、食品収納容器の多くは圧空真空成形によって製造されているが、容器本体に被嵌する蓋が外れないようにするためには、容器本体の罅部と蓋の罅部とを粘着テープやホットキス針等で止着するか、或いは若干無理嵌めして嵌合するようにした嵌合部を有して成形した容器本体と蓋とを使用していた。上記嵌合構造のものは、罅部付近に上下方向に押圧して嵌合する凹凸嵌合部を有したものであり、容器本体に被嵌した蓋を押圧した時に凹凸嵌合部が係合して蓋が止着されるものであった。

【0003】

【発明が解決しようとする課題】しかしながら、上記上下方向の押圧によって嵌合する蓋は、開蓋する時に容器本体を下方に蓋を上方に互いに離反方向に引き剥がすようにしなければならないため、状況によっては離反作用の反動等で容器本体を引っ繰り返したり、収納物の一部を飛散させてしまう等のおそれがあった。本発明は、上記問題点を解消し、蓋を容器本体に被嵌して簡単に止着でき、また開蓋時には容器本体に反動を与えることなく、極めて円滑な開蓋操作によって開蓋することができる蓋嵌合容器を提供せんとするものである。

【0004】

【課題を解決するための手段】上記課題を解決するために、本発明は、合成樹脂製容器本体の上周縁部を折曲状の上縁部とし、この上縁部の外側部に蓋の嵌合突起を嵌入可能な切欠部を1又は2以上形成し、この切欠部から円周方向に適宜ずれた位置の上縁部位置に、係合案内としての第一突起及びストッパーとしての第二突起を、蓋の嵌合突起の巾乃至巾以上の係止間隔を置いて連設した構成を有してなる容器本体と、合成樹脂製蓋の下周縁部を容器本体の上縁部に被嵌する下縁部とし、この下縁部の外側端部から内方に上記切欠部に嵌入可能な嵌合突起を1又は定間隔で2以上形成し、被嵌した蓋を回転させた時に嵌合突起が上記係止間隙部に係止可能に形成した構成を有してなる蓋とにより、蓋嵌合容器を構成したことを特徴とする。

【0005】上記において、容器本体の第一突起及び第二突起は上縁部の上面部から下方に突設し、被嵌した蓋を回転させて嵌合突起の上部と第一突起の下部とが当接した時に蓋部分乃至容器本体部分が加圧によって若干変形可能なように形成することができる。また、容器本体

の第一突起及び第二突起は上縁部の内側部から外方に突設し、被嵌した蓋を回動させて嵌合突起の先端部と第一突起の先端部とが当接した時に蓋部分乃至容器本体部分が加圧によって若干変形可能なように形成してもよい。いずれにおいても、第一突起よりも第二突起を若干高く突設するか、又は、第一突起の切欠部側面を緩傾斜面とし、第二突起の切欠部側面を急傾斜乃至直交状の面とするか、両構造の組み合わせとするのが好ましい。

【0006】また、本発明は、合成樹脂製容器本体の上周縁部を折曲状の上縁部とし、この上縁部の外側部に蓋の嵌合突起を嵌入可能な切欠部を1又は2以上形成し、この切欠部から円周方向に適宜ずれた位置の上縁部位置に、係合案内としての第一突起及びストッパーとしての第二突起を、蓋の係止突起の巾乃至巾以上の係止間隔を置いて連設した構成を有してなる容器本体と、合成樹脂製蓋の下周縁部を容器本体の上縁部に被嵌する下縁部とし、この下縁部の外側端部から内方に上記切欠部に嵌入可能な嵌合突起を1又は定間隔で2以上形成し、かつ上記嵌合突起から円周方向にずれ、容器本体の第一突起と対応する位置から第二突起とは逆方向にずれた位置の周縁部に係止突起を形成し、被嵌した蓋を回動させた時に係止突起が上記係止間隔部に係止可能に形成した構成を有してなる蓋とにより、蓋嵌合容器を構成したことも特徴としている。

【0007】上記において、容器本体の第一突起及び第二突起は上縁部から上方に突設し、蓋の係止突起は周縁部から下方に突設し、被嵌した蓋を回動させて係止突起の下部と第一突起の上部とが当接した時に蓋部分乃至容器本体部分が加圧によって若干変形可能なように形成することができる。また、容器本体の第一突起及び第二突起は上縁部の内側に突設し、蓋の係止突起は下縁部の内側から下方に突設し、被嵌した蓋を回動させて係止突起の先端部と第一突起の先端部とが当接した時に蓋部分乃至容器本体部分が加圧によって若干変形可能なように形成することもできる。いずれにおいても、第一突起よりも第二突起を若干高く突設するか、又は、第一突起の切欠部側面を緩傾斜面とし、第二突起の切欠部側面を急傾斜乃至直交状の面とするか、両構造の組み合わせとするのが好ましい。

【0008】上記構成によれば、蓋の嵌合突起を容器本体の切欠部乃至凹部に合わせて被嵌し、その上で蓋を若干の外力を加えて回転（容器本体を回転してもよく、同じことである）させれば、嵌合突起又は係止突起が第一突起に圧接状態となりながらこれを乗り越え、第二突起に突き当たり、係止間隔部に係止して納まり、蓋が定置状態になると共に容器本体から外れ難くなり、容易に蓋を閉止することができ、蓋が勝手に外れてしまうおそれがない。開蓋するには、若干の外力を加えて蓋を逆回転させれば、上記係止状態が解除され、嵌合突起を切欠部乃至凹部から外すことができ、容器に衝撃を与えること

なく、容器を変形乃至損傷させることもなく、容易に開蓋することができる。

【0009】

【発明の実施の形態】以下、本発明の一実施例を図面によって説明する。図1～図5は第一の実施例、図6～8は第二の実施例、図9～10は第三の実施例を示してある。

【0010】図1～5の実施例において、容器本体1及び蓋10はいずれも適宜合成樹脂材を圧空真空成形して形成してなっている。容器本体1は、上周縁部を平面視で円形状とし、適宜形状の周側面と底面を有した容器であって、上周縁部は容器内側部3、外折れた水平状の鍔部4、外側に垂下した外側部5を順次逆U字状に折曲した上縁部2として形成し、鍔部4の外側部分と外側部5とを切欠して、後述する蓋の嵌合突起14が嵌入可能なように嵌合突起14の平面形状よりも若干大きい切欠部6を形成し、該切欠部6は上縁部2に1箇所のみ形成してもよいが、図示のように一定間隔をおいて複数箇所形成し、この切欠部6から一方向に適宜離れた位置の鍔部4に第一突起7を形成し、この第一突起7は切欠部6方向の側面を緩やかな案内傾斜面7a、反対側面を急な立面7bとして形成し、さらに第一突起7から蓋の係止突起15の巾分乃至巾以上分の係止間隔部8において鍔部4に第二突起9を形成し、この第二突起9は第一突起7側を立面9aとし反対側を適宜形状のものとして形成してなっている。

【0011】蓋10は、容器本体1の上縁部2に被嵌する蓋であって、任意形状の天面外側に下周縁部となる下縁部11を形成し、この下縁部11は、容器本体の鍔部4に接合可能な環状の水平状面12と、この外側に折曲垂下した外側部13を有し、この外側部13の下部から蓋内方に向かって適宜大きさの嵌合突起14を1箇所のみ又は上記容器本体の切欠部6と対応する一定間隔を保って複数箇所に形成し、水平状面12と嵌合突起14間の間隔を、容器本体の外側部5の高さと第一突起7又は第二突起9のいずれか高い方の高さの合計寸法と略々同じか若干大きい間隔に設定し、嵌合突起14からの距離が上記切欠部6と第一突起7間よりも短い間隔の水平状面12部分に、上記係止間隔部8に係合可能な大きさの係止突起15を形成してなっている。

【0012】上記構成の容器によれば、嵌合突起14を切欠部6に嵌入する如くして蓋10を容器本体1に被嵌し、その上で蓋10を回転させれば、嵌合突起14は鍔部4と外側部5を水平状面12との間に挟持する如き状態で水平移動すると共に、係止突起15が鍔部4上を移動し、第一突起7の案内傾斜面7aに当接する。この時、若干力を加えるようにして蓋を回転させれば、蓋部分乃至容器本体部分、即ち嵌合突起14、鍔部4と外側部5、第一突起7、係止突起15の一以上の部分が適度に変形し、係止突起15が第一突起7を乗り越えて係止

間隔部8に係合し、両側の第一突起7と第二突起9に突き当たり状態となって定置する。この状態下では嵌合突起14が鏝部4の下側に嵌合状態となっているため、蓋10は外れることがない。

【0013】開蓋するには、蓋10を上記閉蓋操作とは逆に操作して戻し回転させれば、係止突起15は第一突起7を乗り越えて戻り、嵌合突起14が切欠部6に戻るため、蓋10を外すことができる。

【0014】以上のように、本発明の蓋嵌合容器は、若干の外力を加えて蓋を回転させ、わずかな凹凸部を乗り越えさせることによって、被嵌した蓋が簡便に係止され、外れるおそれがない。また、若干の外力を加えて戻し回転させることにより、簡単に蓋を外すことができる。上記係止構造に係る部分が容器として邪魔になることもなく、容器製造も簡便に可能である。

【0015】図6～8は別の実施例を示しており、容器本体1及び蓋10はいずれも適宜合成樹脂材を圧空真空成形して形成してなっている。容器本体1は、前記実施例と同様に内側部3、鏝部4、外側部5を順次逆U字状に折曲した上縁部2を形成し、同様に切欠部6を形成し、この切欠部6から一方向に適宜離れた位置の鏝部4から下方に第一突起7を形成し、この第一突起7は切欠部6方向の側面を緩やかな案内傾斜面、反対側面を急な立面として形成し、さらに第一突起7から蓋の嵌合突起14の巾分乃至巾以上分の係止間隔部8において鏝部4から下方に第二突起9を形成し、この第二突起9は第一突起7側を立面とし反対側を適宜形状のものとして形成してなっている。

【0016】蓋10は、前記実施例と同様に水平状面12と外側部13を有した下縁部11を形成し、同様に嵌合突起14を形成し、水平状面12と嵌合突起14間の間隔を、容器本体の第一突起7の高さ分よりも若干小さくなるように設定してなっている。

【0017】上記構成の容器によれば、前記実施例と同様に、嵌合突起14を切欠部6に嵌入する如くして蓋10を容器本体1に被嵌し、その上で蓋10を回転させれば、嵌合突起14は鏝部4と外側部5を水平状面12との間に挟持する如き状態で水平移動すると共に、嵌合突起14が第一突起7に当接する。この時、若干力を加えるようにして蓋を回転させれば、部分的な変形を利用して嵌合突起14が第一突起7を乗り越えて係止間隔部8に係合し、両側の第一突起7と第二突起9に突き当たり状態となって定置し、蓋10は外れることがない。開蓋するには前記のように逆の操作をすればよい。

【0018】図9～10はさらに別の実施例を示しており、容器本体1及び蓋10はいずれも適宜合成樹脂材を圧空真空成形して形成してなっている。容器本体1は、前記実施例と同様に内側部3、鏝部4、外側部5を順次逆U字状に折曲した上縁部2を形成し、前記同様に切欠部6を形成し、この切欠部6から一方向に適宜離れた位

置の内側部3（鏝部4の内側も含む）から外側方向に向かって第一突起7を形成し、この第一突起7は切欠部6方向の側面を緩やかな案内傾斜面、反対側面を急な立面として形成し、さらに第一突起7から蓋の嵌合突起14の巾分乃至巾以上分の係止間隔部8において第一突起同様にして第二突起9を形成し、この第二突起9は第一突起7側を立面とし反対側を適宜形状のものとして形成してなっている。

【0019】蓋10は、前記実施例と同様に水平状面12と外側部13を有した下縁部11を形成し、同様に嵌合突起14を形成し、蓋を容器本体に嵌合した時に嵌合突起14の少なくともその先端部分が第一突起7と第二突起9との間の係止間隔部8に係合可能なように構成してなっている。

【0020】上記構成の容器によれば、前記実施例と同様に、嵌合突起14を切欠部6に嵌入する如くして蓋10を容器本体1に被嵌し、その上で蓋10を回転させれば、嵌合突起14は鏝部4と外側部5を水平状面12との間に挟持する如き状態で水平移動すると共に、嵌合突起14の先端側が第一突起7に当接する。この時、若干力を加えるようにして蓋を回転させれば、部分的な変形を利用して嵌合突起14が第一突起7を乗り越えて係止間隔部8に係合し、両側の第一突起7と第二突起9に突き当たり状態となって定置し、蓋10は外れることがない。開蓋するには前記のように逆の操作をすればよい。

【0021】なお、図示しないが、上記実施例とは異なり、第一突起と第二突起とを容器本体の上縁部の内側部に内方に突設し、この両突起に係合可能な係止突起を蓋の下縁部の内側から下方に突設した構成とすることもできる。

【図面の簡単な説明】

【図1】本発明に係る一実施例の蓋と容器本体を示した斜視図である。

【図2】図1のI I—I I線部分断面図である。

【図3】図1のI I I—I I I線部分断面図である。

【図4】図1のI V—I V線部分断面図である。

【図5】図1の蓋と容器本体の嵌合係止状態を示す側面部分略図であり、(A)は嵌合前、(B)は嵌合時、(C)は係止時の図である。

【図6】本発明の別の実施例の蓋と容器本体を示した斜視図である。

【図7】図6のV I I—V I I線部分断面図である。

【図8】図6の蓋と容器本体の嵌合係止状態を示す側面部分略図であり、(A)は嵌合前、(B)は嵌合時、(C)は係止時の図である。

【図9】本発明のさらに別の実施例の蓋と容器本体を示した斜視図である。

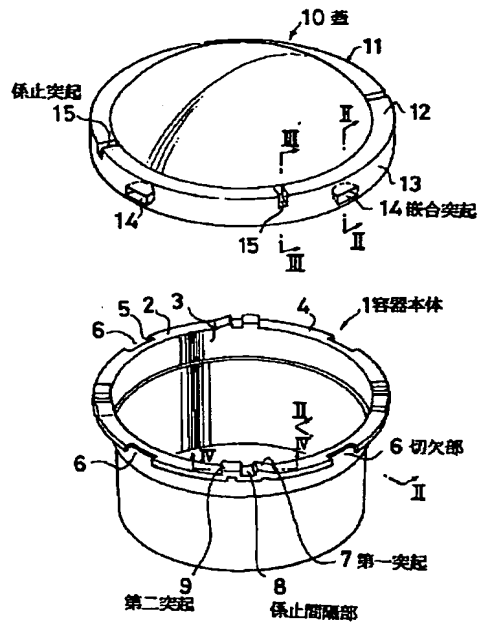
【図10】図9の蓋と容器本体の嵌合係止状態を示す平面部分略図であり、(A)は嵌合前、(B)は嵌合時、(C)は係止時の図である。

【符号の説明】

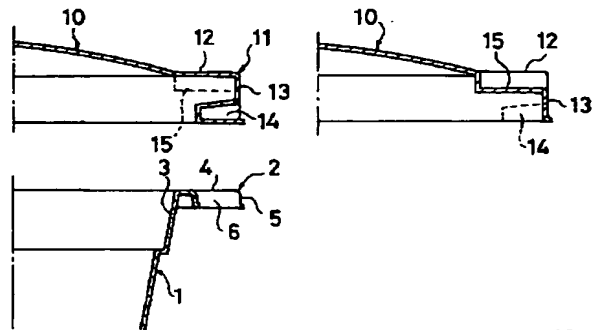
- 1 容器本体
- 2 上縁部
- 3 内側部
- 4 鍔部
- 5 外側部
- 6 切欠部
- 7 第一突起

- 8 係止間隔部
- 9 第二突起
- 10 蓋
- 11 下縁部
- 12 水平状面
- 13 外側部
- 14 嵌合突起
- 15 係止突起

【図1】

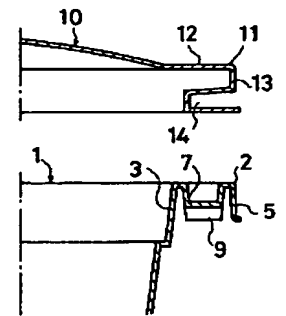


【図2】

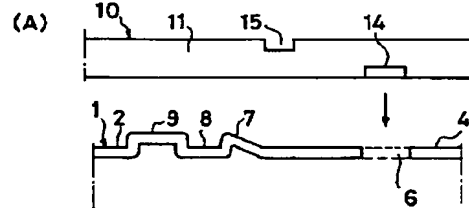


【図3】

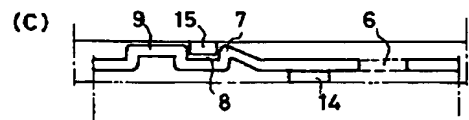
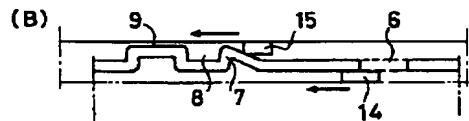
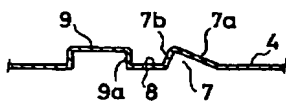
【図7】



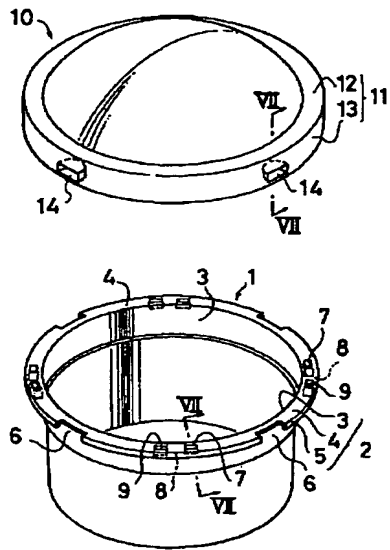
【図5】



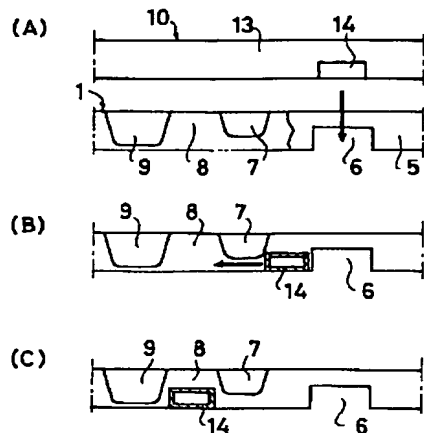
【図4】



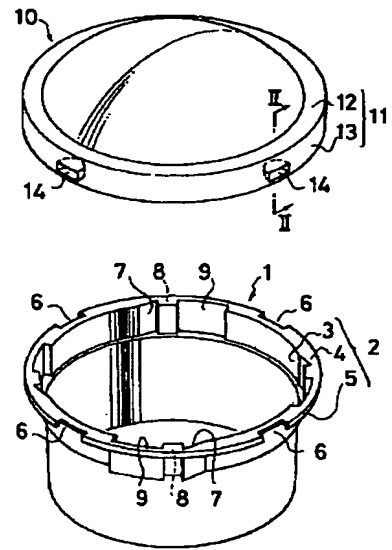
【図 6】



【図 8】



【図 9】



【図 10】

